

# 弘前城かわら版

## Vol.16 [令和8年5月26日]

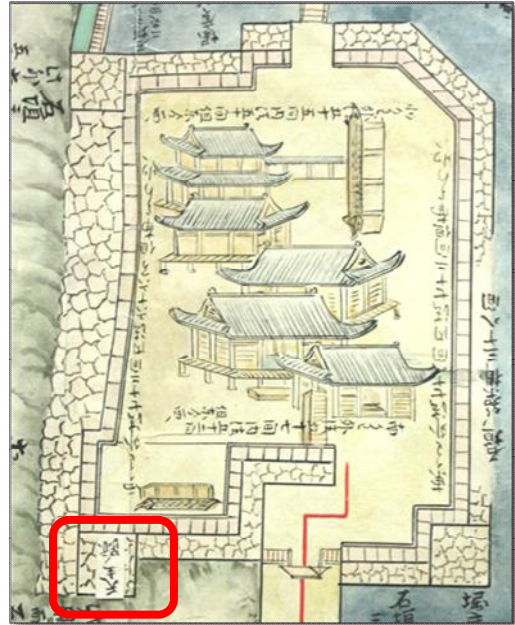
史跡弘前城跡では、史跡内にある重要文化財の天守や城門、櫓<sup>やぐら</sup>の保存修理工事を進めており、令和8年度は天守曳戻し工事のほか二の丸東門と北の郭北門の保存修理工事を実施しています。今号では、弘前城天守について紹介します。

### 1. 元々は五階の天守

慶長16年<1611>築城の弘前城天守は、当初五層の天守で、本丸南西隅に位置していたものの、寛永4年<1627>9月に落雷により武具や多くの記録類とともに焼失したと云われています。以降、天守はすぐに再建されることはありませんでした。築城当初の天守の構造は不明です。

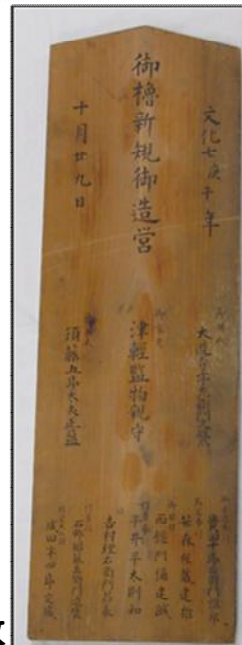
図1は、正保2年<1645>に描かれた絵図です。図の左下の赤印には「天主ノ跡」と記載されており、本丸南西隅に天守があったことがうかがえます。

【図1】正保2年「津軽弘前城之絵図」  
【部分】弘前市立博物館所蔵



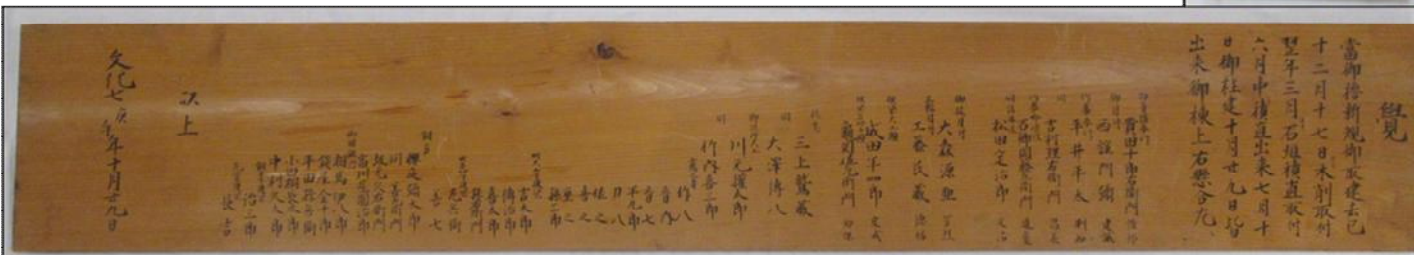
### 2. 天守の再建

弘前藩は、文化2年<1805>5月に蝦夷地警備の功績により領地高が4万6千石から7万石に上昇する高直りとなり、同5年<1808>12月には幕府から東西蝦夷地の恒久的警備を命じられるとともに10万石となりました。9代藩主津軽寧親は、この高直りを契機に3層の櫓（辰巳櫓）改築という申請を行い、幕府から許可を受け、文化6年<1809>から櫓台を改修し、同7年<1810>に櫓を造営しました。寧親は、この櫓を「天守同様御取建」（『封内事実秘苑』文化7年4月15日条）としており、実質的な天守として造営したことが窺えます。この櫓が現在の弘前城天守です。【写真1】は、天守造営の棟札で、「文化七庚午年十月廿九日(29日)」、「御櫓新規御造営」という記載があります。



※棟札(むなふだ)⇒建物の建築・修築の記録・記念として、棟木・梁などの建物内部の高所に取り付けた札  
※庚午(かのえうま)⇒十干と十二支の組み合わせ(60年周期)による年の表記方法で、庚午は西暦を60で割り余りが10となる年が該当する。1810年÷60=30余り10

【写真1】重要文化財附指定 棟札2枚



# 3. 弘前城天守データ

建物形式…土蔵造(白漆喰仕上)、入母屋造  
 階層…三重三階(層塔型)  
 屋根…銅瓦葺  
 寸法…棟高14.47m、1階11.82×9.85m  
 2階9.85×7.88m、3階7.88×5.91m

※柱間6尺5寸(京間、1間=約1.97m)

主な使用材…ヒバ・スギ

文化財指定…昭和12年<1937>7月29日

※国宝保存法による国宝指定

昭和25年<1950>8月29日

※文化財保護法による重要文化財再指定

附指定…棟札2枚(文化7年<1810>年造営)

# 4. 保存修理工事

天守では、江戸時代における主な修理履歴はありません。明治29年<1896>の石垣崩落に伴い、翌年に本丸内部に曳家されています(大正4年<1915>曳戻し)。

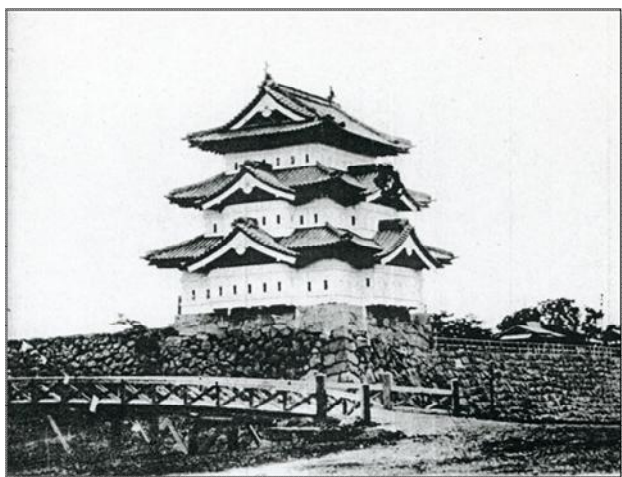
また、昭和33年<1958>に部分修理、同53年<1978>に屋根の一部葺替、平成3年<1991>に災害復旧として屋根一部修理が行われています。同27年<2015>には、本丸石垣修理事業に伴い、本丸内部へ再度曳家されました。

令和8年度<2026>には、石垣修理完成に伴い、元の場所へ曳戻しされ、同10年度<2028>からは耐震補強を含めた保存修理工事を予定しています。



【写真2】 明治初頭の天守 (南東から)

弘前市立博物館所蔵



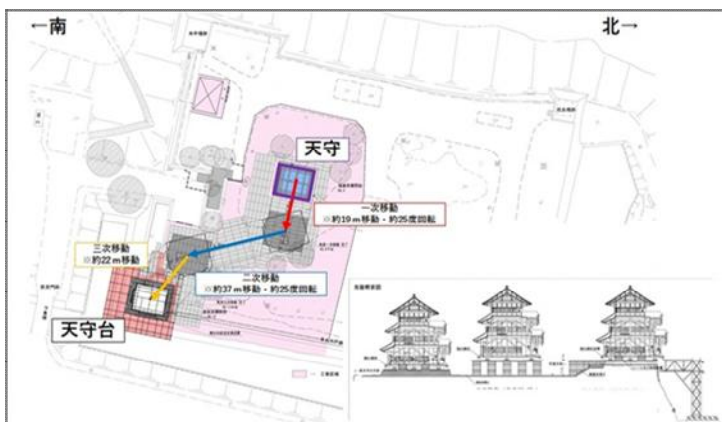
【写真3】 明治27~29年頃の天守

山上笙介1980『ふるさとのあゆみ弘前』I 津軽書房より引用



【写真4】 明治末期の曳家後の天守 (南東から)

※写真4：青森県史編さん資料(青森県史デジタルアーカイブス)「00-0-2495、絵ハガキ(皇太子殿下御台覧公園旧城天主閣)、皇太子殿下御台覧公園旧城天主閣」を加工、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス表示4.0国際(CC BY 4.0)



【図1】 天守曳戻しルート

【発行】 弘前市観光部公園緑地課弘前城整備活用推進室

〒036-8356 青森県弘前市大字下白銀町1番地

電話：0172-33-8739 FAX:0172-33-8799 E-mail：kouen@city.hirosaki.lg.jp